

「うっふっん♡ 激エロお姉さん怪人ムチプリーナようん♡」

真占（しんせん）学園の全校集会の最中、体育館の舞台上に突如として現れた巨大な女はそう宣言すると、腰と頭に手を当て悩ましく身をくねらせた。

彼女は激エロお姉さん怪人ムチプリーナ。エロスでの世界征服を目論む「ドスケベ帝国マジエロス」の激エロ怪人である。

その身長は3メートルを優に超え、胸も尻もムチムチと肉付きの良いすぎる肉体をピンク色のピチピチレオタードに押し包んだ、まさにエロスの化身。ドスケベの女神。彼女の振りまく妖にして艶なる魅力に学園の男子生徒や男性教師は思わず股間にたぎりを覚えてうずくまり、女生徒や女教師たちもぼんやりとその姿に見惚れてしまうほどであった。

そして彼女の背後にはドスケベ戦闘員たち——いずれも黒色の艶めかしい光沢を帯びたビタピタ全身スーツの下にはちきれんばかりのドスケベボディを押し包み、美麗な顔を全頭マスクで覆い隠すことで、非人間化され、女体の有する性的魅力のみを誇示したエロスの侵略者たちである。

「この学校は今この瞬間からドスケベ帝国マジエロスの教育機関として生まれ変わるのようん♡ 生徒も先生もみんなドスケベ帝国のドスケベ戦闘員として教育してあげるわあっん♡」

ムチプリーナは高らかにそう宣言すると、両脇を上げたセクシーなポーズで身をくねらせる。途端に彼女の全身——胸の谷間や腋窩、股間部を中心として——からピンク色のガスがむわぁ……と放出される。彼女の持つ特殊能力の一つ、ドスケベフェロモンである。甘い匂いのするフェロモンは人間の性感神経に訴えかけ、どんな性的嗜好を持つものであっても彼女の虜にになってしまう。ピンク色の気体は瞬く間に体育館全体に広がり、集まっていた生徒や教師たちに作用した。

「異議のある人はおちんぽおったてなさっい♡ んっふふふふっ♡」

その言葉に異議を唱える者は最早誰もいなかった。皆一様にトロンとした目で舞台の上の巨大な女性型怪人を見上げ、股間や胸に手を伸ばしていた。こうなってはもう、ムチプリーナの命令に喜びをもって服従するだけの意志のない人形の完成である。

彼らの運命は決まったも同然だ。マジエロスのドスケベ戦闘員になるため、教育という名の改造手術が待っている。なんぞくエロスの才能のあるものは怪人へと変えられ、搾精奴隷としての才能を見出された者はマジエロスの女怪人や戦闘員の慰み者へと堕とされ

るのである。そこに男女の別はない。男であってもマジエロスの科学力をもってすれば簡単に女に変えることができる。女にチンポを生やすことなど朝飯前なのである！

だが、そんな折――

一人の少年がマジエロスの痴行を止めんとムチプリーナの前に舞い降りた。

「破廉恥な行為もそこまでだ！」

「あらあゝん♡ ヒーロー君じゃなあい」

全身タイトの戦闘服に身を包み、凜然とした表情でムチプリーナを睨みつけるその少年は、「疾風迅雷ボーイ」。小柄な体軀を生かした超スピードとそこから繰り出される目にもとまらぬ連撃を得意とする、最近巷で活躍中のヒーローである。

正体は真占学園の生徒が一人「風雲寺隼人」。その正体は誰も知らない。

「お姉さんを倒しにきたのおゝん？」

「問答無用！ 僕の疾風突きで地獄に送ってやる！」

「いやゝん♡ そんなに敵意剥き出しにしないでゝん♡」

ムチプリーナは巨大な乳房をたゆんっ……と揺らし、両手で♡の形を作る。

「あっはあゝん♡ お色気ビームよおゝん♡」

官能的な声と共に両手の間から♡の形をしたリング状の光線が連続して放たれる！だが、少年ヒーローは超スピードでなんなくそれを回避した。

「これに当たるとお……お姉さんにメロメロになってえ……とーっても気持ちよくなれるのよおん♡ そおれえゝ♡ うっふゝん♡」

後を追うように再びお色気ビームが放たれる。

しかし、そのピンクの光が捉えたの影だけだった。

「いやあゝん♡ あたってえゝん♡」

「遅すぎるぜ！」

回避しながら、ヒーローはあつという間に距離を詰めていた。

しかし、懷に潜り込み、その必殺の迅雷アッパーを繰り出そうとした矢先――。

「なんだ……この匂い……」

手が止まる。

ぼんやりとムチプリーナの巨体を見上げたその瞳が色を失い、トロンと蕩けていく。

「あらあらあ……流石はヒーロー君お色気ビームをかいぐって近づいてくるなんて流石ねえ……」

ムチプリーナのぽつてりと分厚い唇に、勝利を確信した愉悅の笑みが浮かぶ。

「でもお……ざくんねくん♡ お姉さんの周りにはあ……もうすでにフェロモンでいっぱいなのよおくん♡」

挑発的にぶるんと両乳房を弾ませる。レオタードの胸の部分に空いたハート型の隙間からむわあ……とピンク色の気体が漏出し、周囲に拡散していく。

「甘くてくらくらしちゃうくらい……いい香りでしょう？ 魔性のドスケベメスフェロモンよおくん♡」

「馬鹿……な……♡」

ヒーロースーツには通常の毒物を無効化する力がある。体育館に充満する程度の濃度なら問題なく活動できた。それが、あだになった。無警戒で近づいたところに、ドスケベメスフェロモンを思いっきり吸ってしまったのである。

「この香りにはあ人間の性的興奮を刺激して理性を抑制させ……思考力を低下……」

そこまで言いかけて、ムチプリーナはかぶりをふった。

「あーん♡ そんな難しいことはどうでもいいわねえ……とにかく……お姉さんのフェロモン嗅いだらあみーんなエッチなことしか考えられないお猿さんになっちゃうのよおくん♡ ヒーロー君もお……エッチな気持ちになってきたでしょおくん♡」

甘ったるい声が少年ヒーローの耳に蠱惑的に響く。その股間のモノは充血し、スーツにくつきりと浮き出ていた。今すぐ目の前の巨大な女体に擦り付けたい。あの爆乳で挟まれたい。セックスしたい。ちんぽハメたい。そんな単純な欲求で頭の中が埋め尽くされていく。

「僕はヒーローなんだ……こ、こんなフェロモンなんかに、惑わされるか……」

けれど、少年ヒーローは拳を固め、ムチプリーナに反撃しようとする。ヒーローとしての矜持、そして彼の強靱な理性によって、かろうじて正気を保っているのである。

「あーらあん？ まだ頑張るつもりなお？ 凄いわねえくん。じゃあ……特別に……腋見せセクシーポーズでえ……追いうちのフェロモン放出くん♡ あっはあくん♡」

女怪人は巨大な乳房をばるるんつ、と惜しげもなく揺らし、官能の艶声と共に両手で頭を抱えるような煽情的なポーズを取った。

「はーい……むっわあああん♡」

声と運動するように、汗ばんだ腋や胸の谷間から一層濃い色のフェロモンが放出され、まるで意思をもった生き物のように少年ヒーローを取り巻いた。

（これは……ヤバイ……）

咄嗟に息を止めようとしたが、その時にはもう手遅れだった。その魔性の香りを嗅いだ途端、脳内がピンク色に染まった。理性と思考力が霞み、体の奥から湧き上がる性的興奮に、股間の膨らみはますます硬くなっていく。

「どうかしらあ？ さらに濃厚になったメスフェロモンの香り……これはあ……ヒーロー君でも耐えられないわよねえくん♡」

「ああ……はあ、ああ……♡」

「あっはあん♡ 前かがみになっちゃってえ……お勃起のせいでえ……動けなくなっちゃったのお？ お顔も赤くなっちゃって……可愛いわあくん♡」

勝ち誇ったような笑みを浮かべ、ムチプリーナがヒーローへと近づく。

見上げるほど大きな巨体。二人の身長差は2倍、いやそれ以上もある。前かがみになりながら戦おうと拳を構える情けない姿勢のせいで、その差はさらに歴然としていた。

体育館でぼんやりと成り行きを見守る生徒の誰の目にもどちらが勝者で、どちらが敗者であるか明らかであった。

「く……くるなあ……♡ はあ、はあ……くそ、怪人めえ……♡」

「頭の中があ……ピンク色に染まってえ……もうまともに考えることもできないでしょおくん？♡ ねーええ……戦いなんかやめてえ……お姉さんとお……い・い・こ・としなあい？♡」

ヒーローの頭の中にムチプリーナの声が心地よく響く。甘ったるく粘り気のある艶やかな声を聴いているだけでかろうじて踏みとどまっている理性が溶けていく。

「ほーらあ……マジエロスのエロエロ改造で作られた……お姉さんのドスケベな体……みーてえくん♡」

ムチプリーナはヒーローの眼前に屈み、そのドデカスケベボディを誇示するように両手を後ろで組んだ腋見せポーズを取った。腋見せガニ股エロ蹲踞——男の劣情をこれでもかと煽り立てるような激エロポーズで、トドメを刺しにきたのである。

その全身からむわああ……と再び濃厚なメス臭が放たれる。

「ヒーロー君より背もずーっとおつきくてえ……ピッチピチのレオタードに包まれたあ太もももお……お尻もお……ぶつとくてむっちむち……どこにおちんぼ擦（こす）り付けでもすっごくお気持ちいいのよおん♡」

「やめ……はああ……すっごお……♡」

ヒーローの理性はもう崩壊寸前だった。わざとらしいエロポーズで誘う女怪人を睨みつけているはずなのに、蠱惑的な光沢を帯びたピチピチレオタードに強調された迫力の爆乳や、オーバーニーハイブーツをはきさせそうな肉感的でムチムチした太ももを食い入るような眼差しで見つめていた。

「おっぱいはずっしり大きい……Vカップ♡ こんなドスケベ爆乳みたことないわよねえん♡ もーっとみていいのよおくん」

「あああ……おっぱい、おっきい……♡ だ、ダメ……♡」

「ほおくらあ……ぼいいーん……ぼいいーん♡ ぼいいーん……ぼいいーん♡ ゆっさゆっさー♡ ゆさゆさー♡」

目の前で上下に、左右に弾んで揺れる女の魅力の塊。男の視線を吸い寄せるために魔改造された激エロバストの振りまく凶悪なまでのセックスアピールにくらヒーローと言えど、思春期の少年が耐えられるはずはなかった。

「んっふふふ……ぼいんぼいんおっぱいおめめで追いかけてるわねえーん♡ ほらほらあーん♡ おっぱいの谷間もみてえん♡ お胸のところのお……ハート型の穴から見えるながくてえ……ふかあい……た・に・ま……ああん……すっごくいやらしいわねえーん♡」

「あ……あああ……すごい、エッチ過ぎるだろ……くうう、うう……♡」

おっぱいに顔を埋めたい。ふかふかで柔らかいおっぱいの谷間に顔を突っ込んで、甘ったるいフェロモンを嗅ぎまくりたい。おっぱいちんぽを挟んで欲しい。抱き着いておっぱいにちんぽ擦り付けたい。おっぱい。おっぱい。おっぱい。おっぱい。おっぱい。おっぱい——。

頭の中がおっぱいのことで埋まっていく。

「もう我慢なんてできないでしょう？ 今すぐお姉さんのドスケベボディに……ぎゅううううーって……しがみつきたいわねえーん♡」

「あ、あああ……おっぱい……お姉さん……♡」

「いいのよお……きてえーん♡ お姉さんがあ……優しく抱っこしてあげるわあーん♡」

両手を広げた女怪人に向かって、ヒーローがふらふらと近づいていく。もうそこに戦いの意志はない。目にハートを浮かべ、口を半開きにした彼の頭の中には、スケベな妄想と性欲だけが詰まっていた。

「はーい……はーい……いらっしやあい いい子ねえ……ぎゅうううう……♡」

「ふあああ……あつ、あああ……♡」

ムチプリーナの両手がヒーローの体を抱き寄せる。二人の体格差のせいで、その様子はまるで巨大な樹にまわりつき樹液を求める小さな虫を思わせた。

「すっごお……柔らかい……これ、いい……はああ……」

柔らかな肉に押し包まれながら、ヒーローの表情がさらに崩れていく。彼女のドスケベボディは視覚的なエロスを振りまくだけでなく、感触も最高だった。柔らかく、温かく、いい匂いがして、抱きしめられているだけで全身の細胞が心地いいと歓喜の声を挙げていた。

「よしよし……いい子ねえ〜ん♡ ヒーロー君♡ 町の人を守ることよりもお……わるうい怪人を倒すことよりもお……気持ちいいこと優先♡ おちんぽ優先♡ それでいいのよ〜ん♡ 快楽はあ生物の本能だもの♡ ほーらあ……お姉さんのパイパイに顔をずめてえ……ドスケベフェロモンもーつとくんくんしなさあ〜い♡」

心地よく脳内に響く声に誘われるまま、深い谷間に鼻先を潜らせ、頬ずりをするみたいに乳肌を堪能しながら、そこにこもった特濃フェロモンを直嗅ぎする。

「んんんんんんっ〜〜〜♡♡♡」

その瞬間、気持ちいいという感覚で頭を殴られたような衝撃が襲い掛かってきた。

それはまさに嗅覚を通じて感じる快感そのものだった。甘ったるい匂いが鼻腔を突き抜け、脳内をピンク色で染め上げる。ヒーローは全身をガクガクと震わせ、絶頂していた。射精を伴わない脳イキである。

「んおお……♡ ふお……あああ……はああ……にやに、こりええ……♡」

「んっふふふ……」

腕の中で蕩け切った声を上げ、小刻みに痙攣するヒーローを見下ろすムチプリーナの口元に嗜虐と優越の入り混じった笑みが浮かぶ。

「はーい……これでお・し・ま・い♡ 噂のつよおいヒーロー君もお姉さんのエロエロボディとドスケベメスフェロモンには勝てなかったわねえくん♡」

「うう……はあ、はあ……くそ、僕は、まだ……負けてなんかあ……♡」

「なーにい？ おっぱいにお顔ぐりぐりしてそれで抵抗しているつもりなのかしらあくん♡ かーわいいわねえ……♡ いくらお姉さんに抵抗しようとしてもヒーロー君のエッチな体はもう……完全に堕ちちゃってるわよお♡」

「あうう……ううう……」

挑発的な言葉さえも、その甘ったるい声で囁かれると心地いい愛撫として感じられる。このままじゃダメだ、なんとか抵抗しないと。かすかに残った正義の心が抵抗しているが、フェロモン漬けにされた体はムチプリーナに恭順を示すようにその豊満な身体に甘え続けてしまう。

「おちんぽもお……スーツの下でバッキバキにお勃起しちゃってるじゃない♡ どうしたら気持ちいいかはあ〜わかるでしょくん？」

「や……ダメ……それだけは、ダメえ……♡」

したいこと。想像してしまう。それをやったらもっと戻れなくなってしまう。だから必死で考えないようにした。けれどそうすればするほど、かえって意識してしまう。

「遠慮しなくていいのよおくん♡ 勃起おちんぽお姉さんの柔らかあいおまんこにい……スーツの上から擦（こす）り付けちゃいなさあ〜い♡」

欲望を見透かしたように、ムチプリーナは少年のしたいことを口にする。その途端、まるでスイッチが入ったかのように体が動き始めていた。

「んああ……ヤダ……ダメ……んんう♡ あああ……♡ んあっ♡」

「あらあらくん♡ほんとにやり始めちゃったわねえくん♡ お姉さんのおっぱいにお顔埋（うず）めたままあ……エッチな腰へコダンスしてえ……ヒーロースーツとお姉さんのレオタード越しに、擦（こす）り合わせるみたいにい……おちんぽ……ずーりゅ、ずーりゅ、ずーりゅ、ずーりゅうう♡」

小馬鹿にしたような調子の掛け声に操られるように、ヒーローは腰をへこへこと前後させ、勃起したモノをあらうことか敵の女怪人のおまんこに擦り付けてしまう。

ダメだとわかっていても、一度始めればもう止まらなかった。あまりにも気持ち良すぎたから。勃起したペニスを擦り付けるたびに、スーツとレオタードの滑らかな感触がアクセントになって、甘い官能が腰全体にじわあ……と広がっていく。

「なんだかあ……床オナ、してるみたいねえくん♡ くすぐくすぐ……♡」

「んう、んうう……ふおお……♡ だ、だまれえ……んふつ、くうう……♡ はあ、おお……んうう……♡」

「みんなの希望平和を守るかっこいいヒーロー君があ……エロくてスケベなわるうい女怪人相手にトロ顔晒して腰へこつかせてるなんてファンの子が知ったらきつと悲しむでしうねえくん♡」

ムチプリーナの甘ったるい、けれど馬鹿にしきった言葉に、ヒーローの背徳感がチクチクと刺激される。

「それどころかあ……エッチ攻撃で簡単に負けちゃうなさけなーい雑魚オスだって軽蔑されちゃうかもお♡」

このままじゃいけないのに。悔しくて、情けなくて仕方ないのに。

抵抗の意志も、理性も、正義の心も、甘ったるい快感に塗り潰されて、背徳感や悔しさが被虐的な心地よさに変わっていく。

「うっふふふ……そうならないように頑張れ……ヒーローくうくん♡ 腰へこ床オナおちんぽアタックでえー激エロお姉さん怪人なんかあやつつけちゃえ♡ えいえいっ♡ えいえいっ♡ えいえいっ……えいっ……えいっ……このっ……悪の怪人めえ……やつつけてやるう……♡ えいっ……えいえいっ……このっ……このお……♡ 正義のヒーローは……つよいんだぞ……♡ えいえいっ……えいっ……♡」

ムチプリーナの馬鹿に仕切った心情代弁攻撃。ヒーローはしかし、その声に合わせて腰をへこつかせてしまう。えいえいっ♡ と馬鹿に仕切った声に呼応するように、おまんこ

をおちんぽで攻撃してしまう。気持ちよさで頭がトロトロに蕩けて、与えられた言葉をそのまま自分の思考に置き換えられてしまっているみたいだった。

「エッチなだけの……怪人なんか……負けないぞお……♡ えいっ……えいっ……くう……えいえいっ……♡ えーい……えいえいっ……観念しろ……♡ えいっ……えいえいっ……まいったか……このっ……♡ えいっ……えいっ……えいっ……えーいっ……♡ 悪はやっつけてやるう……♡ このっ……このお……この、このこのお……♡ えいえいっ……えいっ……えいえいえいっ……♡ えいっ……えいえいっ……♡」

夢中になって腰を振る。戦っているつもりにさせられて、無意味なおちんぽ自爆攻撃を繰り返させられる。もうヒーローの頭の中には快楽しかなかった。自分の無様極まる姿も、悪の怪人に弄ばれていることも、周囲のドスケベ戦闘員たちがくすくすと笑っていることも、ドスケベな空気に当てられた生徒たちのオカズにされていることもわからない。

さらに、無意味な攻撃を煽る声と同時に、反対の耳から淫らな喘ぎ声が流し込まれる――。

「あつ、あつ、あああゝんダメエゝん……あんっ♡ あんっ♡ あつはあゝん♡ ヒーロー君のおちんぽつんよおゝいいいん♡ やんっ、あつ、あつ、ああゝんつよおい……ヒーローおちんぽにい……まけちゃゝう♡」

それもまたムチプリーナの声だった。ドスケベフェロモンによって聴覚をハックされたせいで、どんな音でも自由自在に聞かせることができる。ムチプリーナのフェロモンマジックの一つだった。

「お姉さん、せーばいされちゃーう♡ あつ、あつ、あつ、ああゝん♡ いやあゝん♡ あつはゝん♡ もゝだめえゝん♡ んあっ♡ やんっ♡ あんっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あつはあゝん♡」

(声……エロ過ぎる……気持ちいい、でも……腰止めなきゃ……いや、もっとこいつをこらしめなきゃ？ あれ、なんで……？ わかんない……気持ちいい、気持ちいいよお……♡)

摩擦のたびに腰全体に伝播する甘い官能。
日常生活で感じることをないレベルの興奮。

少年はもうそれが敵の邪悪な攻撃だともわからない。意識に流し込まれる悩殺的なドスケベ喘ぎに煽られて、自分の勝利を勘違いし、さらに猛然と惨めな腰へコアタックを繰り返してしまふ。

「んっふふふ……お姉さんのお嘘喘ぎ……どーおお？　嘘だってわかっててもおちんぽに響くエロエロボイス流し込まれたらあもーつとスケベな気分になっちゃうわねえ〜ん♡　んっふふふ……ほーんと、ヒーロー君ってえ……チョロいわねえ〜ん♡」

完全に術中にハマった少年を嗜虐の眼差しを向けるムチプリーナ。正義を掲げる真面目なヒーローが自らの魅力に男が溺れ、乱れ、狂っていく様を見るのがたまらなく楽しいと表情が物語っていた。

「じゃーああ……こういうのはどうかしらあん♡」

もう勝負は決していた。にもかかわらず、ムチプリーナは淫らな追撃を繰り返そうとしていた。ドスケベ心情代弁攻撃である。

「んあっ、あっ……あああ……激エロ怪人お姉さんのぶにぶにまん肉におちんぽスリスリきもちいい〜ん♡　エロメスフェロモン……すーはーすーは……んううう〜ん、らめえ〜快樂中枢にきくきくう〜ん♡」

頭蓋骨の内側にダイレクトに響いてくる粘り着くような妖しい声。恍惚に痺れた思考が汚染されていく。自分のモノでないはずなのに、まるで自分自身がそう感じているかのようを感じさせられてしまふ。

「んああ……やめろお……♡　んおっ、んんう……すううう……はあああ……すうううう……はあああ……♡」

声に操られるかのように腰の動きが激しくなって、呼吸を激しくしてしまう。情けないよがり声を上げるたびに自分がダメになっているという自覚を抱きながら、やめられない。気持ちいいから止められない。

「んううう……ふうう、おおお〜ん♡勝手に心情代弁しゆるにやあ思考操られちゃうからあ♡　脳みそピンク色になってえ……♡　気持ちいいしか考えられなくにやるううう♡　んあっ……ああああ……ダメだめえ〜ん♡　精液あがってくりゆう……」

ムチプリーナの言葉に、射精の二文字が頭をよぎる。気が付けばガチガチに勃起したペニス全体が甘く痺れ、突き上げるような衝動が腰の奥に渦巻いていた

「んおおうっ♡ おお……ダメ……ダメえ……♡」

「あっはあゝん♡ もう射精しちゃうのおゝん？ ヒーローなのに……悪の女怪人相手に……屈服お漏らししちゃうんだあゝ」

背徳感を煽る言葉に少年の背筋が震える。ドスケベなだけの女怪人に屈服させられる。負ける。敗北。そんなこと絶対にダメだ。ダメなのに。腰をへこつかせるのを止められない。貪るようにムチプリーナの体を、おちんぼの快楽を求めてしまう。

「いいわよおゝん♡ お姉さんがきもちよく負かしてあ・げ・るわあゝん♡ 最後はカウントダウンしてあげるからあ……ゼロって言ったらお漏らしするのよおん♡ い・く・わ・よおゝん」

「負けない……んおっ♡ 僕は……ヒーローは……負けないんだあ……♡」

「じゅーう……ほーらあ……むちむちふかふかおっぱいにお顔埋（うず）めてえ……濃厚メスフェロモンで脳みそ痺れさせながらへこへこ♡ へこへこ♡ へこへこ♡ へこへこおゝん♡ 床オナ腰へこ頑張れゝ♡」

甘ったるい声。甘ったるい匂い。甘ったるい快感。全てが絡み合って、おちんぼに、脳に響いてくる。

「きゅーう……お姉さんのおまんことおちんぼで仲良しにするのきんもちいいわねえゝん♡ もっとへこへこ腰振ってえ……いっっぱい気持ちよくなりましょうねゝん♡」

抵抗しないといけないのに、ムチプリーナの声に操られるように、腰が律動をやめてくれない。

「はーち……でもいいのかしらあん？こんなにあっさり敵の女怪人に負けちゃっても♡」

ダメに決まってる。わかってる。でも、でも。

「ダメえ……あつ、あつ、ダメなのお……こんなスケベなだけのお姉さん怪人に負けるなんてダメなのにい……へこへことまんじゃ……いい♡ スーツの中で先走りでぐっちゅぐちゅになったおちんぽこすりゅのお……きもちよしゆぎりゅうううん♡ んあつ、あつ、あああ」

ムチプリーナの心情代弁攻撃に流される。意識が塗り潰され、頭の中で言葉が反響し、口から情けない声があふれ出る。

「なーな……仕方ないわよねえん♡ お姉さんがエロ過ぎるのがいけないもんねえ♡思春期のヒーロー君がこんなえつろおい女怪人に勝てるわけないもんねえ♡」

勝てない。ああ。こんなの、勝てるわけがない。気持ちいい。いや、負けちゃダメなんだ。気持ちいいよお……。負けちゃダメなのに。気持ち良すぎるう……。

「ろーく……もうヒーロー君はあ……ドスケベ怪人のお姉さんに捕まって……なさけなあく負け汁漏らすしかないのよおん♡ 負け……まーけ……負け負け負け♡ ヒーロー君のまーけ♡」

負ける。

「ごーお……雑魚ヒーローはあ……えろおいだけの怪人にも勝てませえん♡ んっふふふ……こんなに馬鹿にされてるのに……気持ち良すぎて腰へことまんないわねえ」

気持ちよく負ける。

「よーん……このままだと負けちゃうのよお？ ヒーロー君の勝利を信じてる人を裏切っちゃうのよおん♡？ 悔しいわねえ……でもお……それが気持ちいいわねえん♡」
悔しいのに。いや、悔しいのが気持ちいい。

「負けるのがあ……悔しいのがあ……気持ちいいなんて……お前ってほんとどうしようもないマゾだな♡」

冷たく囁かれた声にゾクッと背筋が震える。

マゾ。その短く鋭い言葉が、刺さってしまつて。

「さあん……あっはぁくん♡ 今すっごいおちんぼ反応したわよくん♡ お姉さんはあ、見逃しませくん♡ お前、なんて呼ばれて……ゾクゾクしちゃうんだぁ♡ なさけなーい……マゾヒーローくん♡」

バカにされてるのに、腰の動きが早くなる。

「にいい……おちんぼの気持ちいいのと馬鹿にされる気持ちいいの合わさってどんどん射精感があがってくるわねえくん♡」

カウントダウンに合わせるみたいに射精感が高まっていく。ここで射精したら終わりだ。何がかはわからない。けれど、確実に終わらされる予感があった。だから必死に抵抗した。抵抗しようと試みた。

「んあぁっ……やだぁ……やだぁ……負けるのだめえん♡ ダメ……負けダメエ……ヒーローなのに……負けて気持ちよくなっちゃ……ダメエ……あっ、あっ、ああぁくん♡ ダメなのに……勝てないよぉ……激エロお姉さん怪人に……負けちゃううん♡ イっちゃううう……イっちゃうよぉくん♡」

「やだぁ……んおっ♡ おおぉ……負けにやいい……♡ 負けないんだぁ♡」

「いーち……いいのよぉくん♡ イって……お姉さんがぁ……お色気ビームでとどめを刺してあげるから♡」

ムチプリーナはそう宣言すると、ハート型に合わせた両手をヒーローに向けた。

「ほーらぁ……うつふうくん♡」

悩ましい嬌声と共に放たれた♡型ビームがヒーローの小さな体に直撃した。

ぽわわーんと間の抜けた柔らかな音が弾けたその瞬間、少年の心と体はピンク色の歓喜に染まった。

「快感が高まってえ……心がトロトロになってえ……お姉さんに負けたい欲求……高まっちゃうわねえくん♡ 我慢はぁ……むだよぉん♡ ほおら……もう一発♡ あっはぁくん♡」

続けざまに放たれるお色気ビームが、けなげな抵抗を甘く、甘く、蕩かしていく。

「もう耐えられないわねえくん♡ ヒーロー君の敗北確定♡ ザコおちんぼのまーけ♡
負け負け負け♡ ヒーロースーツの中に負け汁お漏らししなさあ♡ ザコマゾヒ
ーロー君♡ ぜえろお♡ うっふうくん♡」

「んおおっ……♡ ダメっ、だつめええええ……♡」

「はい……びゅっ、びゅっ、びゅうううう♡ 負け癖お射精……びゅくっ、びゅううう
う……♡」

甘ったるい掛け声に合わせるように精液がびゅくびゅくと漏れ出し、ヒーロースーツを
正義の心を白く汚していく。気持ちいい。負けてしまったのに。悔しいはずなのに。全て
の感覚がただひたすらに気持ちよくて、幸せに泥んでいく。射精しながら、多幸感に脳を
蕩かされながら、本能のままに腰をへこらせ続けてしまう。

「わるういお姉さんに負けるの気持ちいいわねえくん♡ ほーら、負けちゃいましたっ
てアピールするみたいにいきながら腰へコ続けなさあ♡い♡」

「ふおっ♡ んううう……でりゅううう……いくのとまんやあ……ふおっ……んお
おっ……いくっ……またいつくうう……♡」

「悪のお姉さんのわるういデカパイに捕まってフェロモンいっぱい嗅ぎながらあ……屈
服の快感……負ける快感……支配される快感……しーっかりおぼえましょうねえくん♡」

長い長い射精が終わる。終わってもまだ、少年は悪のデカパイに顔を埋めたまま、ビク
ビクと痙攣し続けていた。

「あっはあくん♡ 激エロお姉さん怪人に完全敗北しちゃったわねえくん♡ あらあら……
……出し過ぎてヒーロースーツに……どろどろのシミ、できちゃったわねえん♡」

ムチプリーナはヒーローを引き離し、その小さな体を体育館の上に横たえた。彼の顔は
真っ赤に紅潮し、息も絶え絶えと言った様子だ。体に力が入らない。悪と戦う意思さえ甘
い快樂によって完全に蕩かされてしまったのである。

「こんなにいっぱい出せて……えらいわねえ♡ よしよし……いい子いい子おくん♡
んっふふふ♡ さ、これに懲りたらもうお姉さんのお仕事の邪魔はしちゃだめよおくん
♡雑魚マゾヒーロー君♡」

ムチブリーナは高らかに笑うと、体育館に集められた生徒たちを処置するため、ドスケベ戦闘員たちに指示を出し始めた。最早、ヒーローのことは驚異とも思っていないようだった。

完全敗北。彼のヒーロー人生で初めての、そして一生記憶に残り続ける衝撃的な経験だった。

